

つくりだす喜びを味わう造形活動

～思いを表現に生かす支援の工夫～



那覇市立宇栄原小学校教諭

島村 育与

目次

I	テーマ設定の理由	73
II	研究目標	74
III	研究仮説	74
	1 基本仮説	
	2 作業仮説	
IV	研究構想図	74
V	研究内容	74
	1 つくりだす喜びを味わう活動	
	(1) 造形的な創造活動の基礎的な能力	
	① 発想や構想の能力について	
	② 創造的な技能について	
	③ 鑑賞の能力について	
	2 思いを表現する学習活動	
	(1) 題材との出会いの工夫	
	(2) 表現活動を振り返らせる工夫	
	① 学習カード	
	② 相互交流	
VI	授業実践(第4学年)	79
	1 指導計画・評価計画	
	2 本時の指導	
	(1) 目標	
	(2) 授業仮説	
	(3) 本時の展開	
VII	結果と考察	80
	1 作業仮説(1)の検証	
	【結果】【考察】	
	2 作業仮説(2)の検証	
	【結果】【H児の学習の様子】【考察】	
VIII	成果と課題	84
	1 成果	
	2 課題	

《主な参考文献》

つくりだす喜びを味わう造形活動

～思いを表現に生かす支援の工夫～

那覇市立宇栄原小学校教諭 島村 育与

I テーマ設定の理由

小学校学習指導要領「図画工作科」の目標には、「表現や鑑賞の活動を通して、感性を働かせながら、つくりだす喜びを味わうようにするとともに、造形的な創造活動の基礎的な能力を培い、豊かな情操を養う」と記されている。「つくりだす喜びを味わう」という内容は、児童が自ら感じたり考えたりしたことを形や色を使って表現し伝えたり、作品を鑑賞したりするといった活動そのものが喜びであることを含めている。活動そのものが喜びになるためには、児童一人一人が自らの感覚を働かせ、ものやこと、人と密接にかかわり合いながら活動することを通して、自分自身を素直に表現し伝えていくことが重要になる。今回の改訂では、新たに、「感性を働かせながら」という言葉が加わり、より児童の感覚や感じ方、表現に込められた思いなどを重視していると捉えられる。

私はこれまで、図画工作科の授業を通して、児童に「つくるのが楽しい」という充実感や、「できた」という達成感を味わってほしいと考えていた。児童が充実感や達成感を味わうためには、「表したいものを表したいように表す」ことが重要であると考えていたため、手立てとして、表現に必要な技法を特に重視して指導してきた。それらの手立ては、児童にとって作品完成までの大きな支えとはなってきたが、その一方で課題も生まれた。「作品の完成度」を追求するあまり、技法指導の時間が多くなり、児童の思いや教科のねらいを意識して指導することが弱くなってしまっていた。このような、教師からの技法指導中心の学習を受けてきた児童は、次第に教師に対する依存が強くなり、「次は何色でぬりますか」「これで終わりにしていいですか」など、頻繁に教師に判断を委ねるようになっていった。

これらの反省から、児童の表現に込められた思いを大切にしていくことや児童に自分のイメージをもたせ、思いや考えを深めさせ、それを素直に表現させていくことへの手立てを工夫することが課題としてみえてきた。

思いを表現するためには、児童が目指す作品をイメージして、具体的な色や形、材料などを捉える必要がある。そのためには、学習環境を整えたり、教材との出会いを重視してイメージをふくらませるような手立てが必要になる。また、表現の過程において、「これでよいのか」「困っている(難しい)ことは何か」「これからどうすればよいのか」など、活動を振り返らせることで、新しい技法の必要性や、さらによいものを目指すようになることが考えられる。そこで、教師の支援として、試行錯誤していくような場を設定したり、それぞれの表現活動を具体的に振り返らせる言葉かけや学習カードを工夫することにより、児童が自分の思いを表現していく見通しをもち、自信をもって思いを作品に表現できるようになるのではないかと考える。

本研究では、児童が自分のイメージをもち、思いや考えを深め、主体的な表現活動に取り組むことができるように教師の支援を工夫していけば、つくりだす喜びを味わうことができるであろうと考え、本テーマを設定した。

Ⅱ 研究目標

思いを表現できる子を育てるために、児童の表現活動に対する教師の支援の在り方を実践的に研究する。

Ⅲ 研究仮説

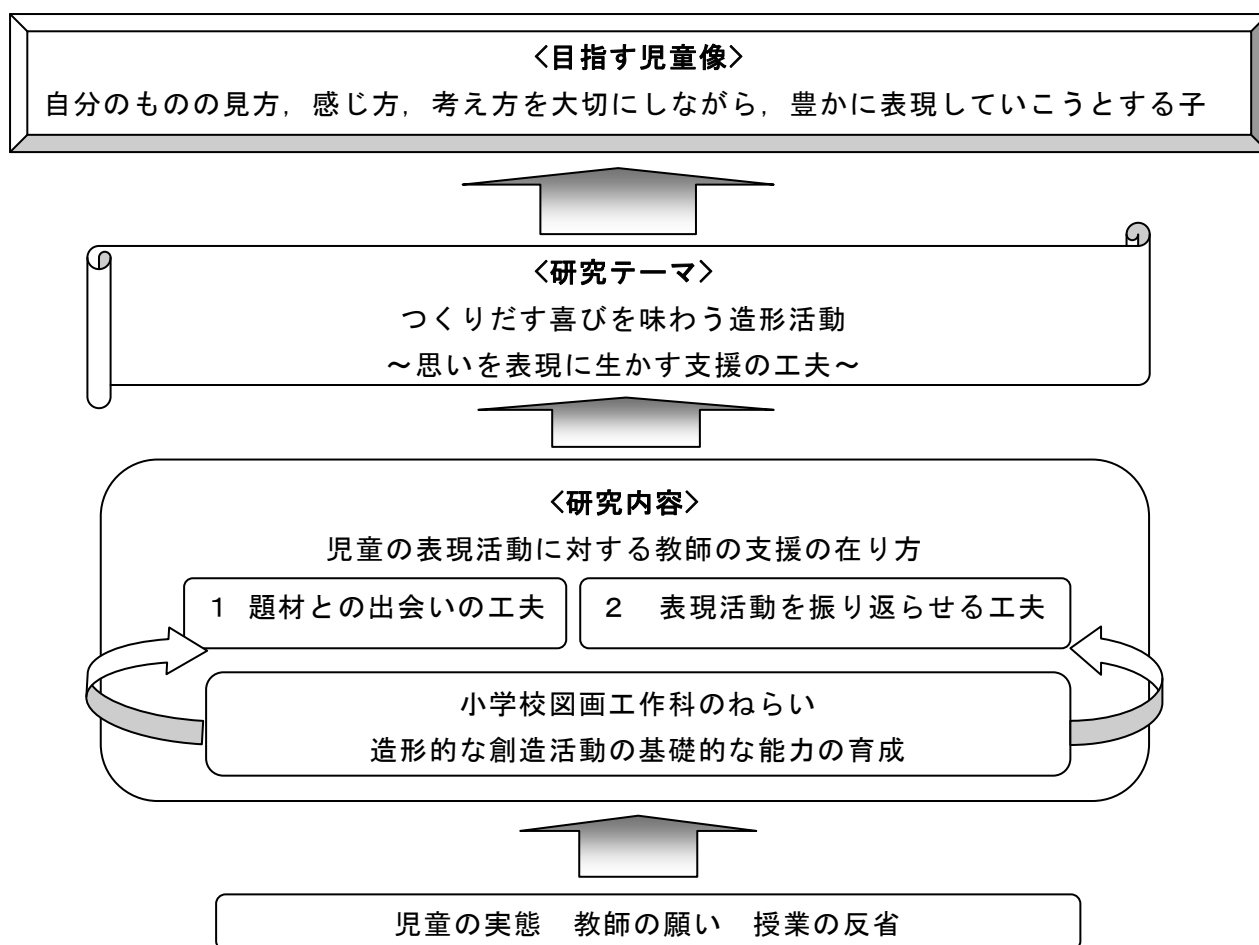
1 基本仮説

思いを表現するための教師の支援を工夫することによって、児童が主体的に活動し、つくりだす喜びを味わうことができるであろう。

2 作業仮説

- (1) 題材と出会う場において、作品のイメージをふくらませる見せ方や試しづくりをさせることにより、児童一人一人が自分の表現方法を見つけ出していくことができるであろう。
- (2) 表現の過程において、自分の表現活動を振り返らせることにより、自分の作品のよさや改善点を確認し、意欲的に活動に取り組むことができるであろう。

Ⅳ 研究構想図



Ⅴ 研究内容

1 つくりだす喜びを味わう活動

「つくりだす喜びを味わう」は小学校学習指導要領解説 図画工作編において次のように記

されている。

「つくりだす喜びを味わう」とは、感性を働かせながら作品などをつくったり見たりすることそのものが喜びであり楽しいことを示している。それは、児童の欲求を満たすとともに、自分の存在を感じつつ、新しいものや未知の世界に向かう楽しさにつながる。また、友人や身近な社会とのかかわりによって、一層満足できるものになる。

板良敷は、『つくりだす』という文言には、作る、造る、創るのどれか特定の意味を指し示しているのではなく、すべての意味を含んでいる。」また、『つくりだす』の『だす』は、表出だけを指しているわけではない。」と述べている。「つくりだす」という活動は、思いや形や色に託して表出するという意味だけではなく、心の中で、自分の表したいことを思いつき、その思いをふくらませることもつくりだす活動の1つであると述べている。

具体的には、表現方法・材料・用具を自分で選び決定したり、表現の過程で友達の表現とのかかわりをもったり、表現の過程を振り返り、自分らしい表し方を確認したりすることによって、自らつくりだす喜びを味わうことができるのではないかと考える。

「つくりだす喜びを味わう」ためには、児童一人一人が自らの発想をふくらませながら、形や色に働きかけ、自分らしい表し方で思いを表現していく楽しさや喜びを味わうことが重要である。これは小学校学習指導要領解説 図画工作編の中における「造形的な創造活動の基礎的な能力」と共通してくる内容である。

(1) 造形的な創造活動の基礎的な能力

小学校学習指導要領解説 図画工作編で、「造形的な創造活動」とは、「自分の思いを形や色などで表したり、よさや美しさを感じ取ったりするなどの活動のことである。」と記されている。つまり、造形的な創造活動とは、ただ単にものをつくるのではなく、作者が意図をもって創意工夫しながらつくりあげていく活動のことであると考えられる。造形的な創造活動を高めていくためには、まず、その基礎的な能力を培っていかなければならない。「造形的な創造活動の基礎的な能力」は小学校学習指導要領解説 図画工作編で次のように説明されている。

具体的には、発想や構想、創造的な技能、鑑賞の能力になる。発想や構想の能力は、形や色、イメージなどを基に想像をふくらませたり、表したいことを考えたり、計画を立てたりするなどの能力である。創造的な技能は、材料や用具を用いたり、表現方法をつくりだしたりするなど、自分の思いを具体的に表現する能力である。鑑賞の能力は、作品をつくったり見たりするときに働いているよさや美しさなどを感じ取る能力である。

造形的な創造活動の基礎的な能力を以下の3つの視点で整理してみる。

① 発想や構想の能力について

板良敷は、「子供たちは、これまでに造形体験から得た知識や技能を、その時、その場の様子に応じて働かせ、思いをふくらませ、新しい発想をしながら、創造的な想像力を働かせ、新たな感じ方や見方を体験することになる。このような創造的な想像力には、創造性の素地となる見通しをもつことや計画性などの構想する力も含まれる。」と述べている。

自分の感じたことや考えたことを形や色，材料などに託して表す活動の中で，児童は想像力を働かせ，表したいものを発想し，材料や人とかかわりの過程で，よりよいもの，納得するものになるように作り続けていく。児童の想像には，いろいろな思いや意図があり，それまでに得た知識や技能を自由に組み替えたり，つなぎ合わせたりして思いをふくらませることと考える。

② 創造的な技能について

表したい思いや意図を表すために，また，自分が納得するように表すためには，材料・用具などの扱い方や生かし方に関わる技能が必要になってくる。板良敷は創造的な技能を「表したいことと結び付いた扱い方や生かし方のことである。」と述べている。

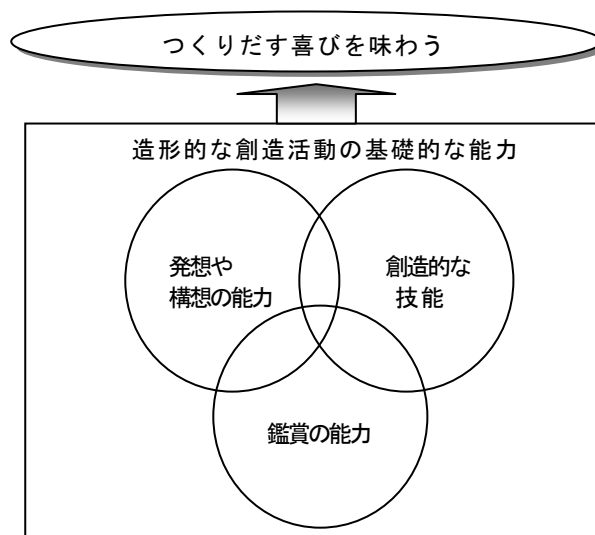
具体的には，扱う材料の大きさ，重さ，手触りなどの感覚や，切る，つなぐなどの操作する感覚・技能，美しさや面白さを感じる感覚などが深くかかわり合っていて働いていると考える。創造的な技能とは，自分の思いや表したいことに合わせて，材料や用具の特徴を生かして試行錯誤し，その過程において表し方を考え，表現方法をつくりだすことと考える。

③ 鑑賞の能力について

板良敷は，鑑賞の能力について「美術作品などの対象に織り込まれたよさや美しさを感じ取り，それに対するあこがれの感情や新たな価値に気付く資質や能力である。」と述べている。鑑賞の能力には，「美しいな」「自分もつくってみたいな」など，よさや美しさの思いのままに味わうことや，「このほうが明るい」と判断すること，「そういう意味があるのか」と新たな価値に気付くこと，「そんな表し方もできるのか」と刺激を受けることも含まれている。鑑賞の能力は，感じたことや思ったことを話したり，友達と話し合ったりするなどの，他者の感じ方や見方と交流することで，深めることができると考える。

上記した3つの能力は，それぞれが独立したものではなく，右の図のように互いに関連し合いながら，効果的に働くものである。《図1》

児童の造形的な創造活動の基礎的な能力が発揮されている姿こそ，つくりだす喜びを味わっている姿であると考え。造形的な創造活動の基礎的な能力を培うことで，児童は，もてる力を自在に働かせ，楽しみながらつくることによって自己の行為に納得し，満足を得ることができる。



《図1》 3つの能力とつくりだす喜びの関連性

2 思いを表現する学習活動

児童が自分の思いを表現するためには，題材との出会いの工夫や表現活動を適宜振り返らせるなど教師の支援が重要な鍵になってくる。

思いを表現する学習活動における，学習活動，児童の思い，教師の支援を次のようにまとめた。《表1》

《表 1》 思いを表現する学習活動と教師の支援

	目標をもつ場			表現活動の場	自己評価	
学 習 活 動	題材との出会い	共通の課題	自己の目標	表現活動 ・立ち止まりー振り返り ・新たな課題ー既有力 ・相互交流	鑑賞	次時の作品への取組み
児 童 の 思 い	・すごい ・面白い ・不思議 ・なるほど ・触りたい	・できるかな ・できそうだな ・やってみようかな	・こんな感じでつくってみたい ・材料は… ・やってみよう	・やってみよう ・うまくいきそう ・あれ、変だぞ ・うまくいかない ・このほうがいいのか ・〇〇さんの方法を参考にしよう ・できた。次は…	・気に入った ・自慢したい ・工夫したこと ・難しかったこと ・次がんばりたいこと ・〇〇さんの作品は…	・次の時間は… ・～も準備しよう ・楽しみだな
教 師 の 支 援	・興味を引くような題材提示 ・児童の体験と関わりのある題材 ・作品との関わり方 ・評価の観点	・題材のよさ ・題材の目的 ・作品提示の工夫 ・評価の観点	・具体的なイメージのめし方 ・言葉かけ ・学習カード ・評価の観点	・自分と作品との向かわせ方（学び方） ・全体や個人に対応できる技術指導 ・仕上げまでの足跡が残る工夫 ・相互交流の意図とタイミング ・評価の観点	・作品に対する思いをもたせる場の設定 ・お互いの作品を認め合う場の設定 ・評価の観点	・次時への意欲を意識した工夫 ・学習カード ・評価の観点
展 開 時 の 工 夫	○活動内容のよさを感じさせたり、学習の意図をはっきりさせたりしながら、自分なりの目標をもたせる。 ○体験や経験と照らし合わせながら、自分なりの目標をもたせ、作品を仕上げるまでの振り返りの視点となるようにさせる。			○目標を意識し思いに沿った活動ができるようにする。 ○自分のペースで取り組み、＜振り返りー見直しー修正する＞という学び方を身につけさせる。 ○自力で挑戦させる場を設定し、自分なりの課題を明らかにさせる。		○作品そのものに対して、気に入った点、自慢したい点、気付いた点などを意識させる。 ○製作時の態度や学び方、ひらめきやアイデアのよさにも目を向けさせる。 ○作品を通して、活動内容まで振り返ることができるような自己評価ができるようにする。
評 価 の 観 点	〈造形への関心・意欲・態度〉 自分の思いをもって、進んで表現や鑑賞の活動に取り組むことや、その過程や結果においてつくりだす喜びを味わっている姿を評価する。観察や対話、学習カードの蓄積などで総合的に行う。 〈発想や構想の能力〉 形や色、材料などを基に、自分の表したいことを思い付いたり、いろいろ考えながら表現に見通しをもったりしている姿を評価する。 「表現のはじまりにおける発想や構想」と「表現の過程における発想や構想」の2点を評価のポイントとし、作品の分析、学習カード、感想文などで具体的に評価する。 〈創造的な技能〉 自分の表したいことに応じて、感覚や経験を生かしながら、材料や用具を用いたり、表し方を工夫したりしている姿を評価する。「材料や用具を上手に用いた」ばかりではなく、「材料の～を工夫している」「自分の思いを実現するためにいろいろな表現方法を試している」などの姿を活動の過程や作品の部分などから捉える。 〈鑑賞の能力〉 自他の作品や美術作品などの形や色などから、表現の面白さを感じたり、よさを捉えたりしている姿を評価する。児童が「何を美しいと感じ、何をよいとしているか」などを具体的に把握する。そのために、「話し合い」だけではなく、「付箋紙を用いた相互交流」などで具体的に評価する。					

教師は、児童一人一人の思いを感じ取り、児童自身に作品への思いを常に意識づける手立てが必要だと考える。そこで、手立てについて以下に整理する。

(1) 題材との出会いの工夫

児童が「描いてみたい」「つくってみたい」「見てみたい」と思うためには、題材との出会いが重要になってくる。「これから何がはじまるのかな」といった期待感をもたせることが大切であり、児童がわくわくするような題材との出会いが、後の表現及び鑑賞の意欲につながる。

児童のやる気を引き出し、意欲的に活動する題材について板良敷の文献を参考に次のようにまとめた。

- ① 活動内容が楽しく、できそう、やってみたいと思う題材
- ② 個々の能力に応じて達成感を得られる題材
- ③ 試行錯誤しながらできる題材
- ④ 自分で材料や用具を選び多様な表現が可能な題材

児童が自分でイメージをふくらませ、それに向かって材料や用具、表現方法を自由に選んで製作する題材を設定すると、一人一人が意欲的、主体的に取り組むことができる。また、自分でイメージしたことが表現活動を通してだんだんと具体化していくことに応じて達成感が得られる。さらに、表現の過程で、つくりかえたり、やり直ししやすい題材は、試行錯誤しながら意欲的に表現を追求することができると思う。

(2) 表現活動を振り返らせる工夫

表現活動で大切なことの1つに、児童が自分の表現に対する思いをいかにもち続けていくことができるかを挙げることができる。意欲的につくっていても、途中で、新たな工夫ができずに活動が停滞してくることがある。そこで製作の途中で表現を振り返る活動を取り入れていけば、児童はイメージをもったり、困っている点などをはっきりと認識し、思いを大切にしながら表現活動を続けていくことができるのではないかと考える。表現活動を振り返らせる例として、学習カードと相互交流についてまとめてみる。

① 学習カード

児童がテーマや材料などに働きかけ、学習課題を追求していく手引きとして「学習カード」を挙げることができる。作品づくりの目的から作品完成まで、児童自身が見通しをもって取り組むことができ、自己の目標に向け、製作が進んでいるかを常に確かめることができる。

学習カードの要点を以下のようにまとめた。

①【視点の明確化】 自分の活動を振り返り、工夫したところやむずかしかったところ、次の時間に工夫したいことは何かなど自分の考えを整理できるようにする。

②【新たな情報の整理】 友達と交流し、作品や感想から気付いたことなど新たな情報を整理し、

国工カード 4年3組 番 名

だれにおくりたいの？

どんな気持ちを伝えたいの？

【作品づくりの目的】

学習計画

1-2	仕掛けを知る	【感想】工夫したところ・気付いたことなど	
3	作品づくり	☆どんな作品にしたいか	
4	作品づくり	☆工夫したいこと	
5	作品づくり	☆工夫したいこと	
6	仕上げ		

今日の学習について
星マークをかこう

①【視点の明確化】
次の時間に工夫したいこと

②【新たな情報の整理】
友達からよさやアドバイスをもらおう

③【これまでの学習活動の整理】
工夫したこと・気付いたこと

《図2》 学習カード例

自分の考えと比較したり、関連させたりできるようにする。

⑥【これまでの学習活動の整理】 これまでの学習活動などを文章で表現して整理することにより、自分の気づきや考えを一層あきらかにできるようにする。

② 相互交流

交流のよさにはいろいろと考えられるが、作品づくりの目的や方向性、表現方法などについて振り返ったり、確認したりすることもその中の1つである。交流によって得られたことが、さらなる表現や鑑賞の意欲につながっていくと考える。

しかし、児童自身が交流を必要としなければ、単なる見合う活動になってしまう。そこで、児童の状況に応じて、交流の形態や実施するタイミングを工夫する必要がある。

学習カードでの振り返りを基に、児童の工夫の発見や課題を情報交換させたい。そのことによって、友達の作品から材料の使い方や使える材料の発見など、自分だけでは発想しなかった表現に気づき、新しい表現を生み出すことができ、課題を解決していくことができると考える。

VI 授業実践(第4学年)

1 指導計画・評価計画

時		学習内容	児童の姿	評価(◎重点評価)
1・2	題材との出会い	○飛び出す仕組みの見本を見ながら、気に入った仕組みをつくる。 ・仕組みのおもしろさを理解してどのように活用するのか考え試作してみる。	・提案された題材の仕組みを自分なりに理解しようとする。 ・実際に作りながら、仕組みを目的にあった作品にしてみようと試みる。	◎造形への関心・意欲・態度 (観察・対話・学習カード) ・発想や構想の能力
3 (本時)	表現活動	○もらった人が喜んでくれるように表現を工夫しながら製作活動を進める。 ・切ったり折ったりしてできた形やそれらを組み合わせてできた形から表したいことを見つける。 ↑ 繰り返す ↓ ・表したいことに合わせて、紙を切ったり、折ったり、貼ったり、できた形を組み合わせたりしながら表し方を工夫する。 ・友達と途中の作品について感じ取ったことを伝え合い表したいものへの思いをふくらませる。	・切ったり折ったりして試してみる。 ・材料を選んで取り組みをする。 ・自分の課題を解決しようとする。 ・自他の表現のよさに気付く。 ・自分の作品を大切に最後まで仕上げようとする。	・造形への関心・意欲・態度 ◎発想や構想の能力 (観察・対話・作品・学習カード) ・創造的な技能 ・鑑賞の能力
6	鑑賞	○鑑賞会をする。	・自他の活動や作品のよさに気付く。	◎鑑賞の能力

2 本時の指導

(1) 目標

切ったり折ったりしてできた形や、それらを組み合わせてできた形から飾ったり開いたりして楽しいものを考えることができる。

(2) 授業仮説

製作の途中で作品を友達と鑑賞し合い、感じたことを伝え合う相互交流の場を設定することで、自分の作品を振り返り、表現方法を確認することができ、意欲的に活動する姿が

見られるであろう。

(3) 本時の展開 (3 / 6 時間)

	学習活動	教師の支援	□留意点 ■評価の観点
導入 (7分)	1 仕組みを見る。  2 本時のめあてを確認する。 いろいろな仕組みを工夫しよう 3 どんな作品にしていきたいか確認する。(学習カード) 	○工夫次第でいろいろな表現があることを読み取らせる。 ○2～3つ前回の仕組みに新たな工夫を加えたものを見せる。 ○学習カードに書いてある「どんな作品にしていきたいか」というところを、もう一度確認させる。 ○カードをもらった人がどんな顔をしてほしいのか想像させて意欲づけをする。	□教師がつくり方を説明せず、児童自身に題材の仕組みや特徴を考えさせる。 
展開 (33分)	4 表現を工夫しながら、製作を進めていく。 《児童の意識の流れ》 ①仕組みの見本を確かめる ②仕組みを決めながら飾りつけを決める ③いろいろな材料で試みる ④しくみを動かし飾りつけの効果を見る 5 友達と作品を見合い、感じ取ったことを付箋紙に書いて伝え合い、自分の作品を振り返る。 6 振り返りを基に製作を進めていく。	○製作中、自由に仕組みが試せるように試し紙を全員に配っておく。 ○材料や用具の要求に応じられるように準備しておく。 ○個別に声かけをしていく。 ○前時でつくった仕組みも自由に見せる。 ○活動が進まない児童には、教師と話し合いをしながら材料を選んだり、友達の製作に目を向けさせ、イメージをつかむきっかけをつくる。 《授業仮説の検証》 ○付箋紙に友達の作品のよいところやアドバイスを書いて交代させる。 ○友達の作品や感想から、自分の作品を振り返り、表現方法を確認させる。	□試行錯誤している姿を観察して捉え、対話を通して思いを把握し、適宜、座席表に記入する。 □相互交流の様子を捉え、その話の内容に耳を傾けたり、考えていることを確認したりする。 ■切ったり折ったりしてできた形やそれらを組み合わせでできた形から飾ったり、開いたりして楽しいものを考えている。(発想や構想の能力)
終末 (5分)	7 活動を振り返る。(学習カード) ・自分の思いや工夫した表し方 ・次回工夫したいこと	○学習カードに、工夫したところや次回工夫したいことを言葉で表現させ、学びを実感させる。	□自分の活動を振り返らせ、考えを整理させる。

Ⅶ 結果と考察

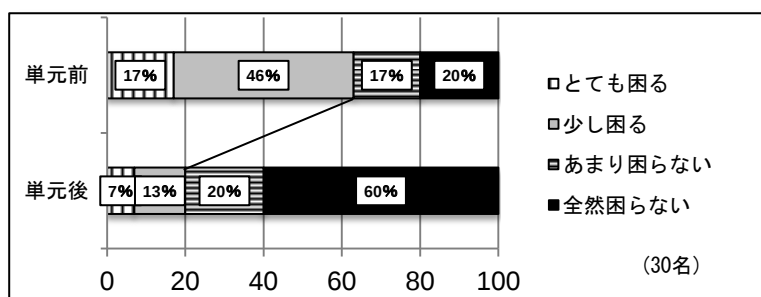
1 作業仮説(1)の検証

題材と出会う場において、作品のイメージをふくらませる見せ方や試しづくりをさせることにより、児童一人一人が自分の表現方法を見つけ出していくことができるであろう。

【結果】

本単元において、第1・2時の題材に出会う段階で飛び出すカードの仕組みに触れる時間を設け、そのおもしろさに関心をもたせた。教師が説明をせず、飛び出すカードの仕組みを提示したとき、児童から「おおっ。」という歓声があがった。提示された仕組みに真剣に目を向けている児童、その形から何かに見立てている児童、仕組みの作り方を予想して話し合っている児童など、飛び出す仕組みの特徴をつかもうとする様子が見られた。特徴をつかみ、選択するために、仕組みの見本を用意したり、簡単に仕組みだけをつくる試しづくりなど、実際に動かしてみることを通して、自分のつくりたい作品のイメージをふくらませることにつながっていった。第3時からは、前時の仕組みにさらに工夫を加えたものを提示していった。

《図3》は、単元前後に実施した児童のアンケートの結果である。「作品をつくるときアイデアがうかばなくて困る」について、単元前は「とても困る」「少し困る」と答えた児童の合算は63%であったが、単元後は20%に減った。



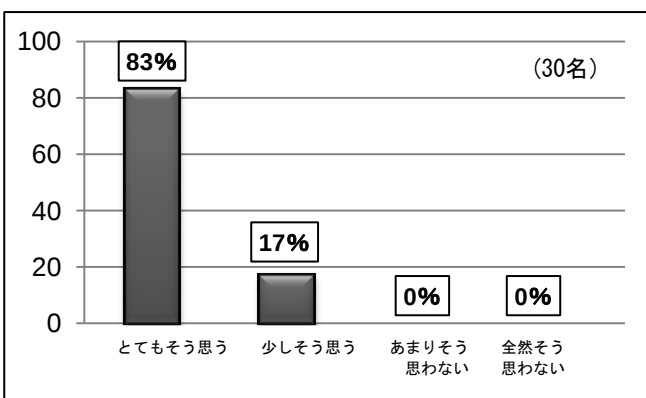
《図3》 作品をつくるときアイデアがうかばなくて困る

《表2》は授業後、題材との出会いに対する児童の感想をまとめたものである。◇印の「できることを知りました」「発見した」という感想から、飛び出す仕組みの構造に自分で気がついた様子が見える。また、□印からは、思いついた発想を試していくことで表現活動の可能性を広げていった様子が見られる。さらに、○印からは、「耳と手と足もつくったりした」「いろいろな形にちょうせんしたい」「いいものができそう」など、自分のカードをつくっていく意欲が見られる。

《図4》は、単元後、「カードをつくるとき、試しづくりは必要でしたか」についての児童の自己評価結果である。クラスの全員が「とてもそう思う」「少しそう思う」と答えている。

《表2》 児童の感想

- ◇折り曲げることで、飛び出す仕組みができることを知りました。
- ◇仕組みは全部まげていることを発見した。
- 試しづくりをして、この折り方はできないかとも思っても、やってみるとできた。
- 試しにつくっていると、アイデアがうかびあがってきた。
- バックンの仕組みをつくった後、耳と手と足もつくったりした。
- 先生が仕組みを見せたとき、むずかしそう思ったけど、やってみればできたので、いろいろな形にちょうせんしたいです。
- 仕組みを組み合わせると、いいものができそうだった。



《図4》 カードをつくるとき、試しづくりは必要でしたか

【考察】

「アイデアがうかんだ」「ちょうせんしたい」という児童の感想の言葉からも分かるように、活動内容が楽しく、できそう、やってみたいと思うように題材の特徴を考えさせることは、児童がカードづくりの世界に入り込んでいく上で意欲の高まりの有効な手立てであった。実際に渡すことのできるカードをつくることで、「相手が喜んでくれるようにつくろう」とい

う目的意識を強くもち、実際に手渡す場面を想像しながら活動に取り組んでいく様子が見られた。また、教師がつくり方を説明せず、児童自身が飛び出すカードの仕組みに触れる時間を設けたことも、「どうやって仕組みがつくられているのか」と想像力を働かせるための手立ての1つとなった。教師から与えられたものではなく、児童が自ら考え、つくりだすという学習方法が、児童の知識や技能を、その時、その場に応じて働かせ、思いをふくらませ、新たな発想をしていくような感じ方や見方になっていったと考える。このような創造的な想像力には、創造性の素地となる見通しをもつことや次の表し方を構想する力となり、他の教科にも通じる力であると考えられる。

次に、試しづくりを取り入れたことで、児童が失敗を恐れずに発想したことをすぐに試すことができた。それは、形を変えたりしながらその特徴を理解し、「組み合わせる」「切ってつなぐ」など、机が試した紙でいっぱいになるほど新たな発見を楽しみ、意欲的な表現活動の高まりにつながった。試しづくりは、児童の想像力を働かせ、楽しい学びとなるだけでなく、その力を様々な状況で試し伸ばしていくことにつながっていくと考える。《図4》の



試しづくりの様子

アンケート結果で、試しづくりの必要性を児童自身が感じていることから「児童一人一人が自分の表現方法を見つけ出していく」手立てとして、試しづくりは効果的であると言える。

これらのことから、導入時にもたせた興味・関心を製作意欲としてつないでいく手立てとして児童自身に題材の仕組みや特徴を考えさせることや試しづくりなどの作品へのイメージをふくらませる工夫をすることにより、児童一人一人が自分の表現方法を見つけ出していくことができたと考える。

2 作業仮説(2)の検証

表現の過程において、自分の表現活動を振り返らせることにより、自分の作品のよさや改善点を確認し、意欲的に活動に取り組むことができるであろう。

【結果】

〈学習カード〉 学習カードの一番上に「だれに送りたいのか」「どんな気持ちを伝えたいのか」を書く欄を設け、製作途中や振り返りの場などで常に作品づくりの目的を確認できるようにした。また、「工夫したところ」「気付いたこと」などを書き込み、自分の作品に対する振り返りを行った。

《表3》は、学習カードに記入された児童の感想である。「みんながやっていない仕組みをつくらうと思って」という言葉は、自己にとってよりよい作品を目指そうとする意欲の表れであると捉える。

《表3》 学習カードに記入された児童の感想

ぼくは、みんながやってない仕組みをつくらうと思って、新しくひもでボールがういてシュートするのをつくりました。せいかうしたのでうれしいです。

〈相互交流〉 単元を通して毎時間、相互交流の場を設け、自分の表現活動を振り返らせる活動を行った。第1・2時は仕組みの構想段階、第3時は仕組みを取り入れた段階、第4時以降は児童がどのようにつくっていくか迷ったり、立ち止まったりしている場面で相互交流に取り組んだ。

はじめに、相互交流の意図を児童と共に確認し、作品を見る視点を与えた。その後、付箋

紙を用意し、作品のよいところやアドバイスを書かせ交代させることで、製作途中の作品について質問したり、作品の感想を伝え合ったりして交流していた。その中で、工夫されているところや自分の作品に参考にしたいところを見つけていた。友達の作品を見ることができるといことで、交流を楽しんでいる様子が見られた。

《表4》は、相互交流を取り入れ、表現活動を振り返っての児童の感想をまとめたものである。◇印の「〇〇さんは」などの感想から相互交流を行う中で、友達の作品から自分にないよさに気付くことができている。□印からは、友達の作品を鑑賞して、自分の作品の改善点を見つけ出したことがうかがえる。

単元後に、学習カードと相互交流の必要性について行ったアンケートでも、「学習カードは必要だった」と答えた児童が97%「相互交流は必要だった」と答えた児童が100%の結果であった。

《図5》は、「作品づくりで困ったときどうしているか」について「自分で他のやり方を試す」「友達の作品を見る」「友達にアドバイスしてもらう」「先生にアドバイスしてもらう」の4項目で順番をつけてもらい、1番目にやると答えたもののアンケート結果である。単元前後を比較すると、教師にアドバイスをしてもらう前に、自分で他のやり方を試したり、友達の作品を見たりしている児童が増えた。

【H児の学習の様子】

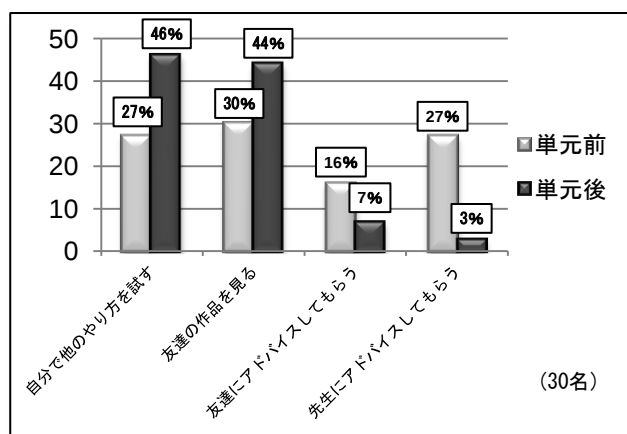
H児は、アイデアがうかばずに、活動が停滞することが多い児童である。H児は、本時のはじめの段階で、何枚もの画用紙で仕組みを切り抜く活動を行っていた。そこに意図はなく、思いつくままに活動を進めている学習状況であった。しかし、近くの友達と交流することによって、クリスマスカードとしてつくりたいと考え、つくり始めた。クリスマスツリーや人間などを立体的に表したい思いがはっきりすると提示された見本を参考にしていって。その後、さらに仕組みを増やそうと考え、全体の形をいろいろな方向から見たり、折り曲げてみるなどしてたき火の部分をつくり、立体的になるように工夫していく姿が見られた。

【考察】

自他の作品について、表したかった気持ちや感じたことを話し合いながら見るという相互

《表4》 相互交流後の児童の感想

- ◇同じバスケットのカードだったけど、僕はイスの仕組みを使って、〇〇さんはビルの仕組みを使っていた。
- ◇2つの仕組みを組み合わせている人がいておもしろかった。
- ◇〇〇さんの作品で仕組みがちゃんと閉じたらかくれるので参考になった。
- ◇切り込みを深く入れると、前にとび出すことがわかった。
- もう少し仕組みを増やしたい。
- きちんと起き上がるように、仕組みをつくり直した。
- ちがう仕組みも組み合わせたい。



《図5》作品づくりで困ったとき1番目にどうしましたか



本時のはじめの表現



単元終末の表現

交流の場を設け、自己を振り返る機会とした。学習カードに書かれた内容にも「みんながやっていない仕組みをつくろう」「工夫したところは、テントの仕組みにあなをあけて、中のもが見えるようにした」「人間をつくるのが上手と言われたので、このちょうしでがんばりたい」など、作品について工夫した点や気に入っている点を書き表している。そのことは、立ち止まり、振り返り、新たな課題を見つけるという相互交流の意図する学び方を身につけ、自分の作品に対する確認ができていると捉えることができる。

自分の作品について話し合うということは、目標に向かってこれまで表現活動してきたこと(作品)を評価する自分と評価される自分が同時にある状態をつくりだす。このような体験をつんでいくことにより、自分の作品を客観的に見つめることができる。それは、批評する自分と激励する自分が存在する状態をつくりだし、自らを少しでも高めていこうとする姿勢がつくれ、自分の思いを表現に生かしながら活動を続けていくことができたと考える。

《図5》「作品づくりで困ったとき1番目にどうしましたか」のアンケート結果に対して、友達の作品を参考にしたり自分で他のやり方を試したりしている児童が増えたことも、自己を客観的に捉え直し、課題解決に向けて表現活動を改善したり、新たな課題に取り組んでいく力となったのではないかと考える。今後も表現活動の振り返りを意識させる指導を継続していけば、作品づくりで困ったときにまず自分で他のやり方を試す子が増えていくであろう。

作品完成後の鑑賞会では、自分の作品づくりにおける工夫を話したり、友達の話聞いたりする機会となった。「はやく持って帰りたい」「お母さん喜ぶかな」という児童の声から、作品に対して完成した喜びや達成感を味わうことができたと捉えることができる。

これらのことから、表現活動を振り返らせる手立てとして、学習カードを利用し相互交流を計画的に進めることによって、自分の作品のよさや改善点が確認でき、学ぶ意欲に結びついていくことができたと考える。

VIII 成果と課題

1 成果

- (1) 題材と出会う場において、児童自身に題材の特徴を考えさせることや、試しづくりをするなど、作品への思いをふくらませる工夫をすることにより、一人一人が自分の表現方法を見つけ出していくことができた。
- (2) 学習カードの活用や相互交流を計画的に進めることで、作品を〈振り返り―見直し―修正する〉ことができ、完成まで意欲的に活動に取り組むことができた。

2 課題

- (1) 様々な教材において「試しづくり」を機能させる研究を深めていく必要がある。
- (2) 児童の実態に応じた相互交流のタイミングや形態について整理していく必要がある。

《主な参考文献》

- 『小学校学習指導要領解説 図画工作編』 文部科学省 日本文教出版 (2008)
- 『小学校学習指導要領の解説と展開 図画工作編』 安彦忠彦 監修 藤江充・三澤一実 編者 教育出版 (2008)
- 『新学習指導要領を生かした図画工作科の授業』 板良敷敏 編著者 小学館 (2002)
- 『小学校図画工作科 基礎・基本と学習指導の実際』 板良敷敏 編者 東洋館出版 (2002)